

## 図書館員の四季：私のシネマ探訪

### 映画と私

社会保険神戸中央病院

林 伴子

夏の映画と言えば「怪談」というのが子どもの頃の定番だった。怖い思いをしたせいか、私はスプラッターもホラーも苦手な正統派？映画ファンを自認している。で、何を見ているかというところ以外のもので面白そうだと食指の動いたものになる。

とりあえず、手近なところにあった映画のパンフレットを出してみた。傾向としては、SF、ミステリー、アニメに幾分偏っているようだ。でも、何度見ても飽きないのは“サウンド・オブ・ミュージック”－最初のオープニングシーンだけでも、ああ見に来て良かったと思ってしまう（ちなみに再公開される度に劇場で見ている）。近年、ミュージカル映画というジャンルがすっかりすたれてしまったのは残念なことである。

日本の映画はあまり見ていない。国民的映画である“寅さん”も実は一本も見ていない。ただ、最近では“Shall We Dance?”のような素敵な作品もあるので見逃さないようにと思っている。一番最近見たものも邦画で、“トキワ荘の青春”という昭和30年代の漫画家の卵達を描いた作品である。主役の本木雅弘以外は無名に近い役者達なのでドキュメンタリーを見ているような気になった。少しはあの頃を知っている分だけ懐かしい思いがした。

洋画では“いつか晴れた日に”－エマ・トンプソンがアカデミー脚色賞を受賞した映画で彼女が主演している。19世紀のイギリスを舞台にした文芸作品で、見終わった後、ほっと溜息をつきたくなるような美しい映画だった。

この頃よく物忘れをするので、私の‘映画鑑賞必携’になっているのが‘パンフレット’である。情けないことに、顔は覚えているのに名前が出てこない、など日常茶飯事である。だから、私はパンフレットを買うために映画館にでかけて行く。それに、映画館で見る、大きな画面で見るこそが映画の醍醐味だと思うのである。ビデオでは得られない迫力を求めて、映画館に通い続けたい。

◇ ◇ ◇

### 映画の感動は、私の活力剤！

日本赤十字愛知女子短期大学

塩瀬 亜紀

映画は大好き。試写会招待や鑑賞券プレゼントにせっせとハガキを書くこともあって、月に3、4回は映画館に行く。おまけに最近ではビデオを借りたりもする。数は見ているのだが、その作品の選び方にはかなり片寄りがあるように思う。

私にとって映画は、日常空間からの脱出であり、ストレス解消法。だから難解なものや、気分が落ち込みそうなものは見ない。人がやたらと殺されたりするものや、ホラー、ついでに邦画もほとんど見ない。底抜けに楽しい、心が暖くなる、しみじみと美しい、元気になる、そういうポイントをかなえてくれそうな作品を選んでいるようだ。ラブストーリーならなおのこと・・・。

そんな中途半端な映画好きではあるが、オススメをいくつか紹介させてもらおうと――

『ショーシャンクの空に』（スケールが大きく最後のドンデン返しが痛快。なんと図書室を作るシーンがある！）